

デイジーとは誰か— *Nuns and Soldiers* の一考察

内藤 亨 代

初期の論文集『善の至高性』においてマードックは人間の生にはいかなる外的な到達点（テロス）もないと述べ、生の意味を人間経験の内に求めることを言明した。*The Bell*の最終場面でマイケル・ミードは神と決別して世に出ていく。人間界の中に善を求めて善く生きようとする生き方はその後の作品群ではどのように表現されているだろうか。

*The Nice and the Good*では役職上他者に力を行使する立場に置かれたジョン・デュケインが善く振る舞おうと思考して行動する過程が描かれる。デュケインは無神論者である。

*Nuns and Soldiers*は信仰を失って修道院から出てきたアン・カヴェッジがこの世での生き方を確立するまでの一年間を扱っている。その最終場面でアンはデイジー・バレットの消息を知って自分もその後に続こうと思う。アンはどのようにしてデイジーを発見したのだろうか。

この小説はアンの大学時代の友人ガートルード・オープンショアの再婚話を主軸に展開する。ガートルードは自分の幸福を追求することを信条とする人間で、ずっと自分に恋心を抱いていたカウントを再婚後も仕えさせることに成功する。アンをも取り込もうとして拒絶された。カウントにひそかに恋していたアンは決定的にカウントを失う。

修道院を出たとき神への信仰を失っていたアンは、キリストは自分の救いになるのではないかという望みを持っていたが、夢と幻覚の中で会ったキリストは孤独の内に死と共に歩むことを教えて消えた。人間経験を越えた到達点はないことを悟られ、カウントと共に生きる可能性も閉ざされたとき、初めてデイジーの姿が見えてくる。アルコール依存症で社会の底辺層にいる保護や監視の対象ではなく、温かい心で他人を迎え入れようとした人として。女性隠者として新しい生活を始め

るためにアメリカに発つ前夜、パブで偶然耳にした会話から浮かぶデイジーの姿は、アンの目に先達と映った。

デイジーはこの世に帰るところを持たない者、持てるものになることを拒む者、悪意を持たず見返りを求めずに与え、孤独の内に生きる者である。これはそのままこの世にあったキリストの姿と重なるであろう。ただしデイジーの内面は一切語られず、作者による簡単な生育史と会話による発言以外はすべて他人から見られ解釈された人物像が示されている。従ってこれはアンによって発見されたデイジー像である。

アンはもうデイジーを探すのは自分の任務ではない、それでももしデイジーが自分を本当に必要とするならきっと再会するだろう、と思う。二人はそれぞれ別の道を歩みながら或る意味で一つの共同体に属しているのである。しかしアンのたどり着いた生き方は決して世の多数の者の選択とはなり得ない。せいぜい一つの理想、または心の指標として留まるだろう。言うまでもなく人間は他者との共同において生きる存在だからである。その困難さをマードックは小説の中で示し続けてきたとも言える。ただ、性愛における可能性を期待していたようにも見える。*Nuns and Soldiers*ではガートルードとティムの関係が相当する。この問題は他の作品群でも示唆に留まっていてそれ以上の展開はない。

マイケルの時代、同性愛は非合法だった。*The Green Knight*ではもはや特別な関係とは見られていない。同様に超越的な生の目的についても時代の進行が強く反映されている。マードックは人文主義の教育を受けその影響下に育った。人文主義があらゆる生の領域に浸透していく20世紀という時代を誠実に生きて真正面から向き合い、考え、表現した人であることをその作品群は示しているのではないだろうか。